

とくべつしせき だざいふあと くらつかさ
特別史跡『大宰府跡』・蔵司地区の調査成果
 ～大宰府史跡第236・245・246次調査～

九州歴史資料館 文化財調査室 調査研究班

当館では、大宰府政庁跡西側の蔵司^{くらつかさ}の地名が残る丘陵を、平成21年度から継続的に調査しています。現在は、大型礎石建物SB5000東側の平坦地（A・B区）及び丘陵南端部（F区）において、官衙跡^{かんが}の構造解明に向けた重点調査を実施しています。

1. 蔵司とは

古代（奈良・平安時代）に、九州全体の行政や軍事・外交を担当した地方最大の役所「大宰府」には、多くの下部組織がありました。その一つが「蔵司^{くらつかさ}」で、九州各地から税として納められた特産品や布を管理していました。発掘調査を実施した場所の小字名が「蔵司^{くらつかさ}」であった場所と考えられています。

江戸時代の記録によると、蔵司丘陵上には133個の礎石^{そせき}が点在し、古い瓦が多く散乱していたようです。

大正3（1914）年、中山平次郎博士は、蔵司丘陵上の多くの礎石が埋没していることや高熱を受けた鉄製品が多く見つかったことなどを報告し、倉庫や工房が存在したと考えました。その後、昭和8（1933）年、蔵司丘陵上での工事に伴って畑地を地下げした際、大型礎石建物跡が発見されました。

その後、調査が行われず、詳細は不明なままでしたが、平成21年度以降、九州歴史資料館が蔵司丘陵の本格的な調査を開始し、今日に至ります。

なお、蔵司地区は大正10（1921）年に政庁跡とともに国の史跡「大宰府跡」に指定され、昭和28（1953）年には特別

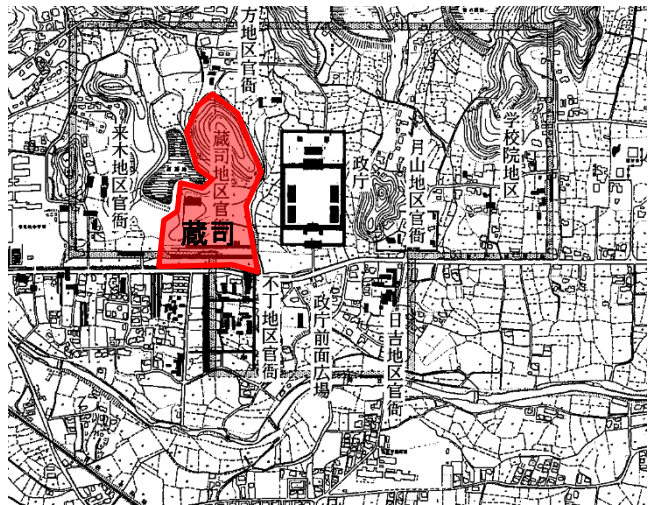


図1 蔵司地区の位置

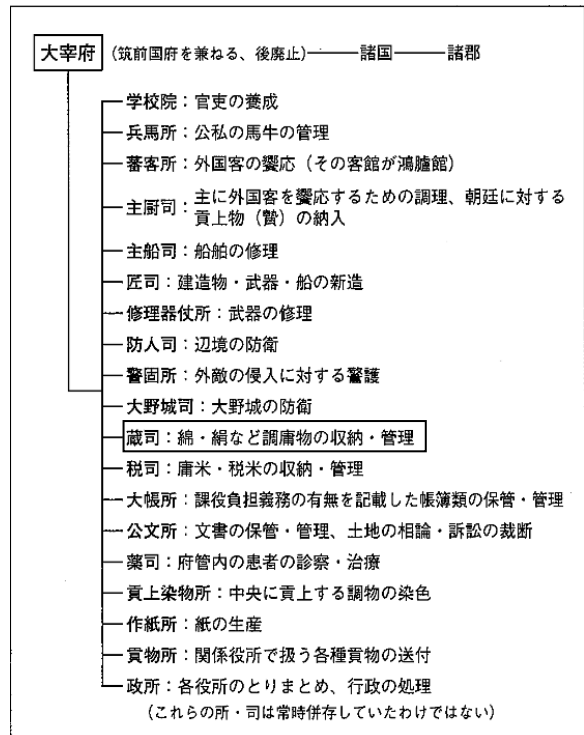


図2 大宰府の実務を担った行政機関「司・所」

史跡に昇格しました。

2. 蔵司A・B・F区における重点調査成果

今年度の調査成果としては、丘陵南東部の倉庫群の配置が確定したこと、その西側で掘立柱の柱穴列を発見したこと、さらに丘陵南端で大量の瓦や礎石建物、掘立柱建物の柱穴列を各1棟新たに発見したことなどが注目されます。

★今年度の調査成果のポイント

- ①昨年度、丘陵南東部のA・C区で奈良・平安時代の礎石建物群がコ字状に配置されていたことを確認していました。今年度、A区北西側を調査したところ、その場所には、礎石建物が存在しないことが判明しました。
⇒このことにより、礎石建物群は北・西・南側にそれぞれ2棟、合計6棟により、「コ」の字形に建物群（倉庫）を配置し、中央の空闲地を広場とする構造であることが最終的に確定しました。
- ②今回、A・B区で礎石建物に先行すると考えられる柱穴列1棟を新たに発見したことから、蔵司丘陵では大宰府成立期（7世紀末前後）から建物群が配置され、大宰府政庁とともに計画的な官衙の造営が行われた可能性がさらに高まりました。
- ③丘陵南端（F区2トレンチ）で密集した状態の瓦を大量に確認しました。また同じ場所で、礎石も確認することができました。これらのことにより、礎石建物等の重要施設が存在することが明らかとなりました。
- ④この大量に出土した瓦は、その出土状況から、礎石建物等の施設が焼失等により倒壊した、あるいは解体された痕跡と推測されます。
- ⑤西側のトレンチ（F区1トレンチ）では、東西に並ぶ柱穴4基を確認しました。

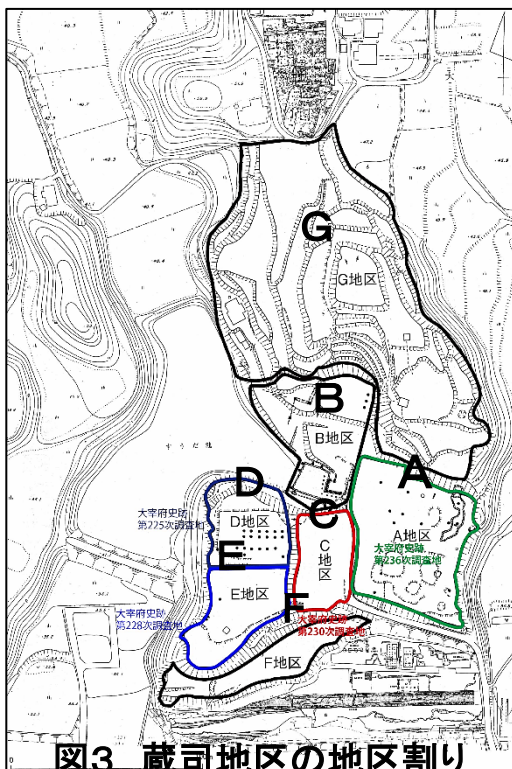


図3 蔵司地区の地区割り

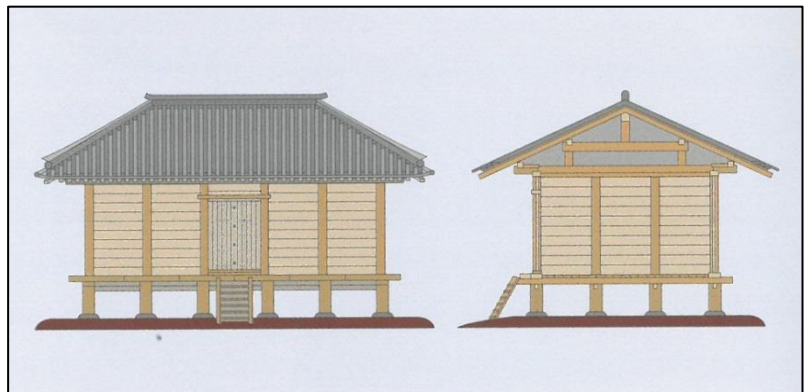


図4 高床式倉庫模式図

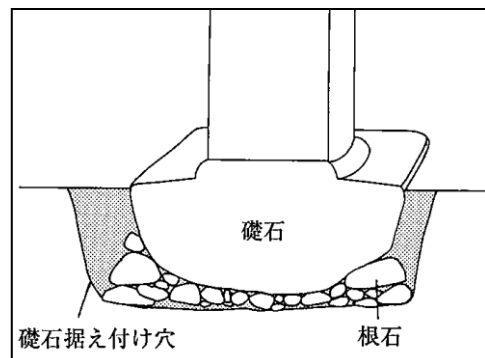


図5 礎石据付状況模式図

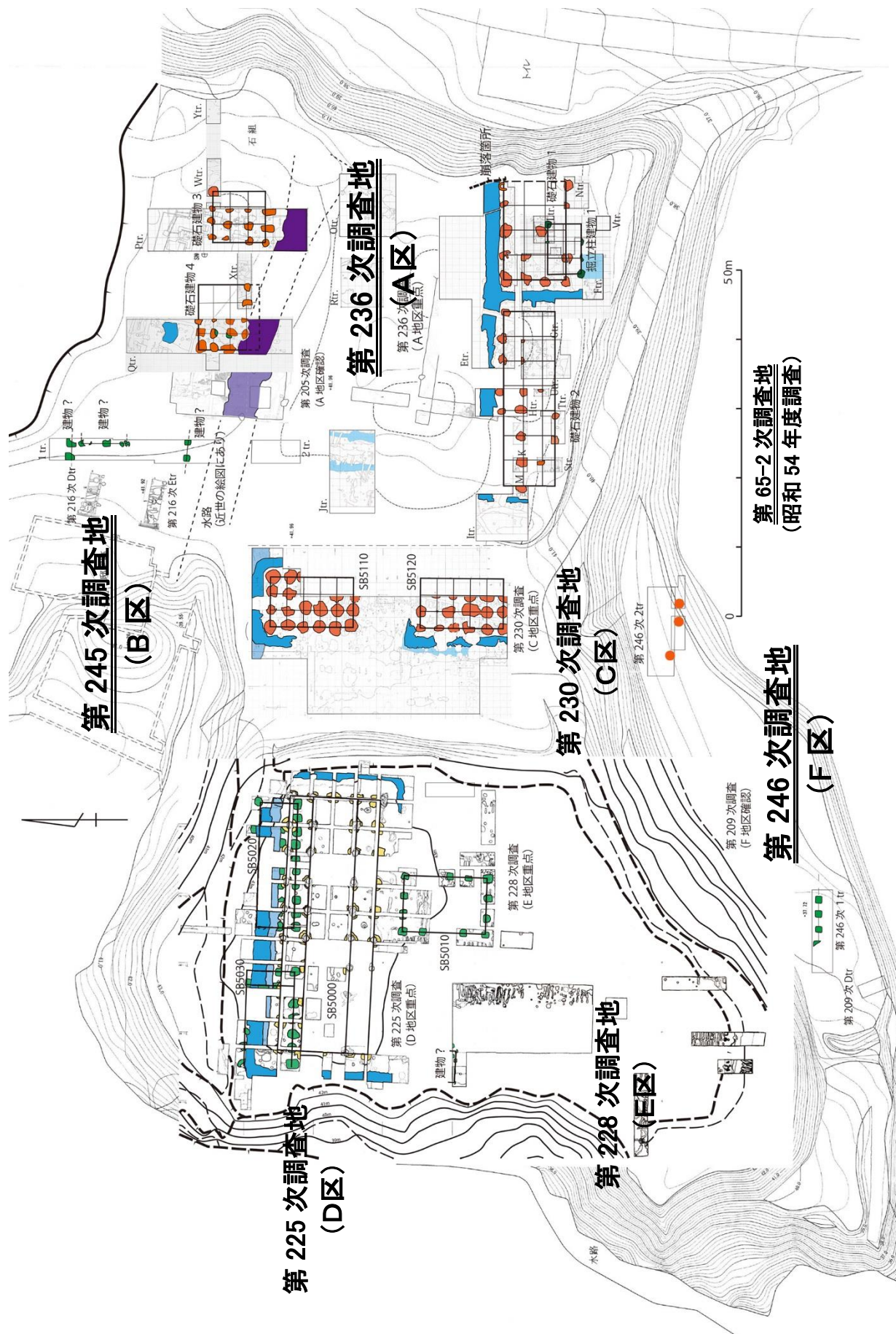


図6 蔵司丘陵南半の調査状況(1/800)

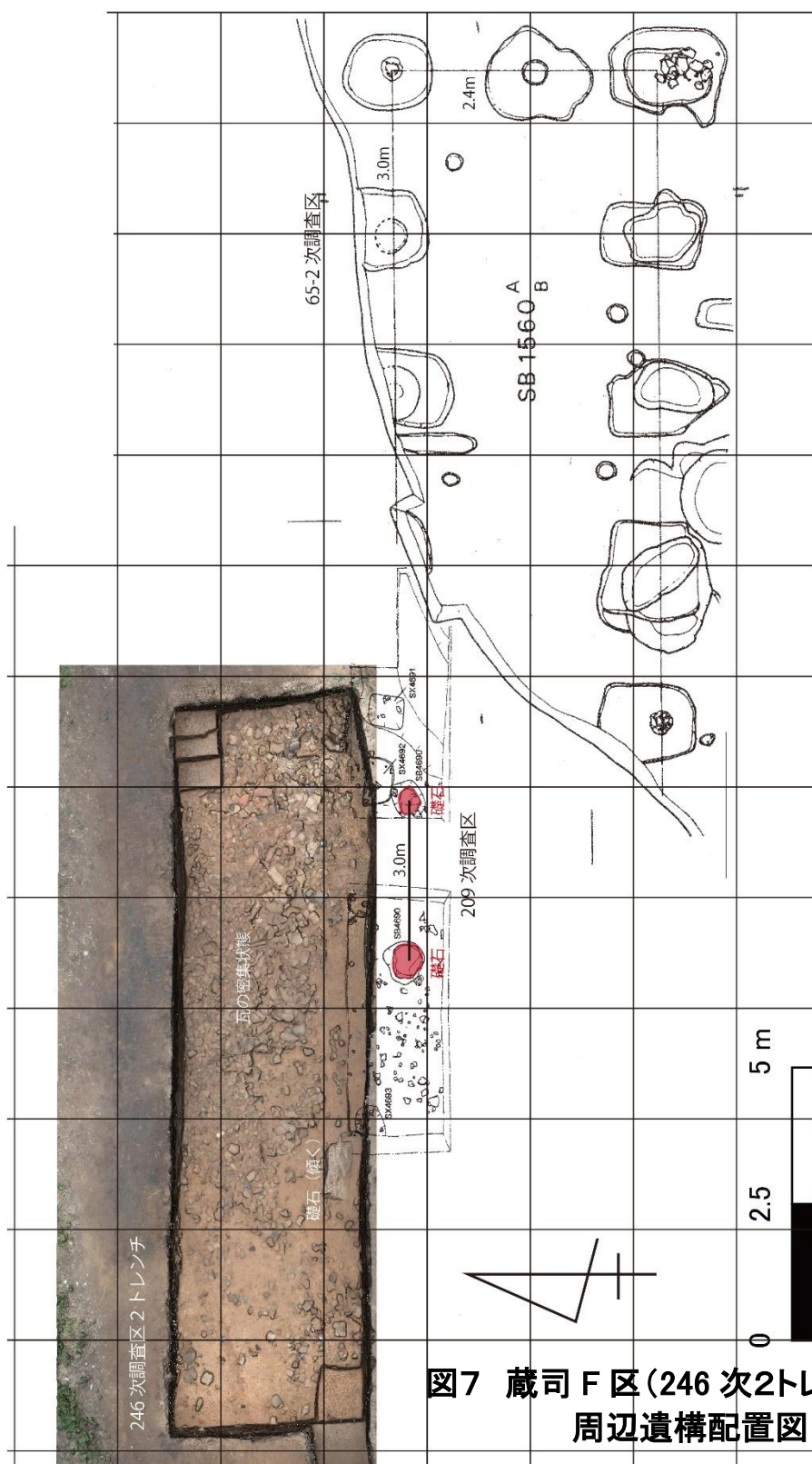


図7 蔵司F区(246次2トレンチ他)
周辺遺構配置図

出展一覧

- 図1：太宰府市2005『太宰府市史』通史編Ⅰ 一部改変
- 図2：杉原敏之2011『シリーズ「遺跡を学ぶ」076 遠の朝庭・大宰府』（新泉社）一部改変
- 図3・6・7：九州歴史資料館作成
- 図4：九州歴史資料館2015『大宰府史跡ガイドブック2 特別史跡大野城跡』
- 図5：奈良文化財研究所2004『古代の官衙遺跡』Ⅰ遺構編

※現在調査中で、今後修正の可能性もあるため、図6・7の転載は禁止します。